

別添

※1：陽性が強く疑われる場合とは、H I V検査の結果は不明だが、ニューモシスチス（カリニ）肺炎・クリプトコッカス髄膜炎等の日和見感染症の症状があり、H I V陽性であることが推定できる場合をさす。

※4：医師等は、曝露事象の状況を確認し、下記により予防内服の効果について説明を行う。被曝者は、予防内服の利益と不利益を考慮して、服薬を開始するかどうか自己決定する。

○抗H I V薬予防内服説明書

針刺し事故などでH I V曝露血液等に曝露した場合の感染のリスクは、B型・C型肝炎と比較してかなり低く、B型肝炎の1/100、C型肝炎の1/10程度で、針刺し事故においては、平均0.3%、粘膜の曝露においては平均0.09%程度です。また、感染直後に抗H I V薬を服用することで、そのリスクを79%低下させると言われています。そして、現在行われている抗H I V薬による多剤併用療法を行うことで、曝露後の予防効果はさらに高まると考えられています。

H I V曝露血液等の曝露後には抗H I V薬による予防服用を開始することとなります。予防服用期間については、通常4週間の継続服用が必要と考えられています。

感染を予防する利益と副作用による不利益を考え合わせた上で、予防服用が必要と判断された場合には、少しでも早く内服を開始することをお勧めします。

○薬剤の服用方法と副作用

代表的な副作用のみを掲載（詳細は添付文書参照）

<BIC/TAF/FTC>ビクトルビ配合錠（紫褐色の錠剤）[通常1回1錠 1日1回服用]

副作用：頭痛、悪心、下痢

B型肝炎患者の服用にて、服用中止時に肝炎が悪化することがある。

○内服薬の種類・用量

<BIC/TAF/FTC>ビクトルビ配合錠 （1回1錠、1日1回）